

【6】授業実践例

〔1〕運動場面

1 保健体育

〈Aグループ〉

(1) 生徒の実態 (学年・性別・障害名はP121参照)

氏名	障害による特性と学習に関わる実態
S・N	下肢に二次障害があり動きが緩慢で、教師とマンツーマンで学習に取り組む必要がある。
M・T	指示による見通しが持ちにくく、模倣により運動を行っている。
H・M	他人との関わりを好まず、レポートのとれている担任とマンツーマンで学習に取り組んでいる。
H・Y	積極的に運動をしようとはするが技能が伴わないため他人の事が気になり話を聞かないことが多い。
K・N	積極性にはやや欠けるが、好んで運動を行っている。筋緊張が強く、動きにぎこちなさが見られる。
K・S	初めて行うことに非常に消極的ではあるが、好んで運動を行っている。
K・T	落ち込みが激しく、授業に遅れたり、見ているだけの時が時々あるが、体を動かすことは好んでいる。
Sk・Y	発作により調子の波が激しく、自己抑制、身体意識等に大きな遅滞が見られる。運動規制もあって、肥満傾向が顕著となっている。
St・Y	認知力や身体意識等に遅滞が見られ、行動が緩慢で集団的な取り組みが困難である。肥満傾向である。
Y・F	他人に対する依頼心が強く、個別の指示がないと自主的に運動に取り組みにくい。

- ・個人の能力差が非常に大きい。
- ・移動に時間のかかる生徒が多いため、授業時間内の運動量の確保が難しい。

(2) ねらい

全生徒が楽しみながら生き生きと体を動かすようにし、健康を保持・増進させる。

(3) 方針と手だて

- ・種目特性を味わわせるだけでなく、手具等を使った養護・訓練的な運動も取り入れ、運動機能の向上も図る。
- ・生徒が楽しんで体を動かせるように毎時間音楽を流しながら学習を進める。
- ・同一種目を行う場合でも、障害の重い生徒にはマンツーマンで易しい課題に取り組みせ、できるだけ皆が同じ種目に取り組めるようにする。

※年間指導計画

月	4	5	6	7	9	10
単元名 及び主 な内容	◎集合、整列、基本の運動 ・ペアを知る ・いろいろな歩き方	◎並び方 ・いろいろ ・変形ダッシュ等	◎ボール ・転がす ・つく等	◎水泳 ・水慣れ、水遊び ・バタ足 ・呼吸等	◎運動会練習 ・走る、跳ぶ ・組体操等	◎長なわとび ・またぎこし ・くぐる
月	11	12	1	2	3	
単元名 及び主 な内容	◎短なわとび ・いろいろな ジャンプ ・なわを回す ・回しながら跳ぶ		◎手具を使った運動 ・棒 ・なわ ・ボール ・フープ等			

(注) 水泳のグループ編成は別とする。

(4) 実践例（変容を含む） - Sk・Yについて -

単元名	授業場所	教具	アプローチの仕方及び変容
集合 整列 基本の 運動	グラウンド	特になし	常に担任と共に授業に出てきた。グラウンドまでの移動距離が長いこと、階段があることから、担任が手を引いて集合場所へ来ていた。ペアを決めたり、並ぶ場所を決める時も担任がマンツーマンで指導した。基本の運動では立ったり座ったりする時に仲々動かず、手を引っぱる等の補助を必要とした。
ボール 運動	体育館	色々な種類のボール ボーリング	常に担任と共に授業に出てきた。体育館に来てもしューズをなかなかはき替えなかったり、ステージに上がったりして皆と同じ場所に集まらないことが多く、担任が近くについて皆の中に入るよう声かけをした。授業が始まると進んでボールを取りに行ったり、投げたりした。ボーリングでは見通しを持って皆と同じ運動ができた。
水泳	プール	棒 浮き輪 ビート板	担任が付いているものの自主的に一人でプールに集合し、整列もできた。自分がプールに入る番になると素早く行動し教師と共に入水していた。最初は常に教師に手を添えてもらい泳いでいたが、段々と少しの時間手を離しても怖がらずに泳げるようになった。プールサイドから離れた場所でも泳げるようになった。
運動会 練習	グラウンド 体育館	ボール マット フープ とび箱	発作等の関係により、教室で横になっている時間が多く、あまり授業に参加できなかった。参加した時も、授業に途中から参加したり、見学ということが多かった。団体種目が多いため、なんとか集団についていかせようと補助をしたり、声かけをしたが動きが鈍く、やる気もあまりみられなかった。
なわとび	体育館	長なわ 短なわ 足型マット	遅刻を一度もせず、集合場所にも自分からきちんと集まれた。声かけをしなくても自主的に長なわ等を準備したりできた。運動も一人でなわをとび越したり、くぐったりできた。学習中に座り込んだり、皆と違った行動をとることが一度もなく、時間いっぱい楽しそうに体を動かしていた。

(5) 考察及び今後の課題

実践事例に上げたSk・Yについては4月から現在に至るまでほとんど毎時間、教師がマンツーマンで指導を行った。学習場所への移動から学習中の声かけ、補助、そして教室へ帰るまで常に学習として指導した結果、体育学習に対する見通しが徐々に持ててきたように思われる。他の生徒についても同じようなことが言え、全体の指導の後に個別に近い声かけ



なわとびをするSk・Y

等を行ってきた結果、時間いっぱい学習に取り組めるようになった。しかし、この結果については、授業場所、生徒の体調、興味関心によって大きく変わるということも言える。種目特性により授業場所が限られてくるが、気候・天候によって体調・気分等が左右されやすい生徒達であるので、この点で今後は授業場所に変化を持たせるようにしていかなければならないと思われる。

本年度は、これまで個人種目を中心に指導してきたので、今後は本グループにおいて団体種目を行い、その中で一人ひとりをどう生かしていくか、授業場所、教材、教具の検討をふまえて研究していければと考える。

〈Bグループ〉

(1) 生徒の実態

- ・男子9名、女子7名（内、てんかん2名、自閉的傾向2名、崩壊性行動障害1名等）計16名で編成され、比較的障害の程度が軽く、運動能力が高い方のグループであるが、個人の能力差がかなり大きい。
- ・ある程度の指示は理解できるが、それに比べて運動経験は不足しており、技能は低い。
- ・運動能力テスト、体力診断テスト等の実態は〔資料編〕参照。

(2) ねらい

- ・運動の持つ楽しさを味わわせ、少しでもすすんで生き生きと運動することができる。
- ・運動経験を積み重ね、運動技能の向上と運動機能の促進を図る。
- ・めあてを持って最後までがんばろうというねばり強さや集中力を養い、かつ仲間と協力することによって社会性を培う。

※年間指導計画

	4	5	6	7
単 元 名 と 容	◎短距離走・リレ		◎水泳	
	<目標>・10m走・クラウチングスタート・バトン渡し集団走		・水慣れ、シャワー・ビート板バタ足	
	・50m走・20m走・追い抜き走（インターバル走）・リレー等		・水遊び（水中石ひろい	
	・100m走・30m走・集団走・タッチリレー・スウェーデンリレー		・クロール・距離 水中ジャンケン、またくぐり等）・種目	
	9	10	11	12
単 元 名 と 容	→◎長距離走		◎バスケットボール	
	<目標>		・グループ（話し合い）・第1次リーグ戦	
	・インターバル走		・ルールづくり	
	・集団走・リレー		・第2次リーグ戦	
	・ミニ駅伝等		・ためしのゲーム	
			・30秒シュート	
			・バス&シュート	
			・班練習の工夫	
			・最初のルールづくり	
			・バスリレーゲーム	
			・2メンダッシュ	
			・一人ひとりが活	
			・ボール慣れ（1人で、2人で、チームで）	
			・3メンダッシュ	
			躍するためには	
	1	2	3	
単 元 名 と 容	◎体操		◎卓球	
	・リズムに合わせた体操		・ためしのゲーム	
	・棒を使って		・乱打	
	・エアロビック体操		・カット	
	・用具を使った体操		・トーナメント	
	・なわを使って		・ラケット打ち	
	・短なわとび		・ラリー	
	・長なわとび		・ダブルス	
	・ワンバウンド打ち		・個人戦	
	・ドライブ		・リーグ戦	
	・団体戦			

(3) 方針と手だて

- ・各種運動そのものの持つ楽しさを味わわせ、生徒の発達段階や障害の実態に応じた指導をする。
- ・実態把握（体格体位、諸テスト、検査等）を行い、より正しく詳しい生徒の実態をつかむ。
- ・集団的スポーツでは、特に自分たちで話し合っ規則づくりをし、自主性や自治力を高めながら、社会的適応力の育成や社会性を養い、みんなで運動する楽しさを味わわせる。
- ・個々の実態や記録を正しくとり、具体的なめあてをできるだけ自分で設定させることで、見通しをもち、自らすすんで取り組めるようにしたい。
- ・特にBグループでは、集団のルールやきまりを守りながら、その中で自分の力を最大限に発揮したり、仲間意識を高めたりして、一人ひとりがチームの中で活躍できるような場を工夫したい。

(4) 実践例 ～ひとりひとりを生かすバスケットボールの実践～

①ねらい

- ・自ら課題をもち、すすんで動こうとして楽しくゲームすることができる。
- ・チームで協力し、少しでも勝つ工夫をして練習、ゲームができる。
- ・ルールを自分たちで作りながら公正にゲームし、自治的範囲で運営することができる。

②具体的方針と指導上の配慮事項

- ・一人ひとりの実態に応じて、学習カード、グループカードを作成（右図参照）
- ・常に話し合いを取り入れ、チーム決めをさせ、ルールなしからのゲームでスタート。その都度問題を話し合わせ、ルールを1つずつ決めていった。

バスケットボール 学習カード ～個人用～ (赤) 班(上)

No.	学習内容	自分の実態	話し合い	決めたルール	実践の様子
1	ゴール下30秒シュート	カバール	カバール	カバール	カバール
2	ボールをもち、すすんで動こうとして楽しくゲームすることができる。	カバール	カバール	カバール	カバール
3	チームで協力し、少しでも勝つ工夫をして練習、ゲームができる。	カバール	カバール	カバール	カバール
4	ルールを自分たちで作りながら公正にゲームし、自治的範囲で運営することができる。	カバール	カバール	カバール	カバール

- ①ゴールに入れたら得点②人を押さない③人をつかまない④取り合いはジャンプボール⑤ラインなし

しでかべにつかえたら相手ボール⑥ゴールは3つで高3点、中2点、低1点⑦ボールを持って歩かない等、そしてゲーム→練習→ゲームの形式でゲームの質の向上を目指した。

③変容例

◎ゴール下30秒シュートの変容例					はじめの実態	主な手だてと配慮	変容後の様子と課題				
9月5日		11月8日									
高	中	低	計	高				中	低	計	
M男	0	0	2	2	1	2	5	8	○シュートがなかなか入らず、特定の生徒でゲームをしていた。	○ゴールを高・中・低の3つにすると発案。5対5が教師を入れて3対3の2チームで兄弟チームとした。	○各人の能力に応じてシュートチャンスが拡大・また人数を少なくすることで一人ひとりの触球数が増える。兄弟チームなので応援もふえた。
S男	2	5	16	23	10	4	19	33			
Y男	2	4	15	21	6	2	19	27			
N男	2	1	16	19	4	8	7	19	○ボールをもって走ったり、相手をつかんだりして危ないプレーが多かった。	○1つずつルールづくりをした。何回もする生徒には得点にするとの意見も。	○どんなのが正しく、危険でないプレーかの判断がつくようになる。しかし審判の仕方はまだまだ。
O男	1	3	4	8	2	3	12	17			
N女	4	3	8	15	3	4	12	19			
O女	4	0	9	13	2	1	9	12	○はじめはラインなしだったが、3対3にしたので広すぎて、間のびしたり、えらいという生徒が出だした。	○ラインの決定。ラインを意識してプレーをしはじめた。	○徐々にラインを決めても、広がって攻めるようになったり、それぞれのチームでの役やポジションを考えるようになった。
M男	3	3	20	26	4	7	20	31			
Y女	0	5	9	14	2	6	15	23			
E女	5	3	21	29	10	6	25	41			
I女	2	1	15	18	3	2	20	25			
S女	0	1	4	5	1	0	7	8			
I男	3	1	15	19	7	6	21	34			

④考察と今後の課題

主に昨年度からバスケットボールの実践を手がけ、自分たちなりに工夫したり、考えながら楽しんでゲームができることを目指してきた。意欲的に取り組み、少しずつ成果も表れつつあるが、これだけ個人差の大きい生徒をゲームの中でどう生かすか、どう評価するかを今後生徒たちと共に考え、工夫してさらに実践を深めていきたい。



ゲームの様子

2. 養護・訓練

10分間走

(1) ねらい

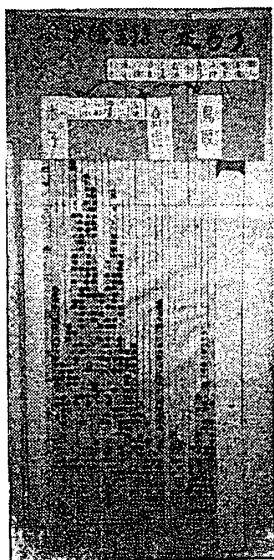
- ・持久走をすることによって筋力や全身的持久力、心肺機能の向上を図り、健康を増進する。
- ・走ることの意識向上を図り、一人ひとりの能力に応じためあてに向かって努力する態度を養うと共に、日々の努力の積み重ねの大切さを知り、かつ競争心を培う。
- ・長距離を自分の力をふりしぼって走ることで、根気強さや粘り強さを養う。

(2) 主な内容

鳥取～米子マラソン (10分間走)

(3) 方針と手だて

- ・実態に応じた一人ひとりのめあての設定 (P129 表-6「10分間走めあて一覧表」参照)
- ・1周300メートルのコースで半周 (150メートル) 走ることにより竹ぐしを1本ずつ渡し、もらった竹ぐしの本数が自分の記録 (評価) となる。
- ・基本的に一週間 (5～6回) 単位で各自のめあて **めあての「くし」をもらうT・M** をチェックし、続けて達成できていれば、少しずつめあてをあげていく。
- ・生徒の実態に合わせて「米子まで走ろう」「倉吉まで走ろう」の表を作成し、自分で走った距離にシールをはることで確認させ、意欲づける。
- ・毎日の運動 (特にマラソン) の積み重ねが大切であることをおさえ、この成果がマラソン大会や記録会につながることを意識づける。
- ・個々の実態や走力の実態に応じて、声かけ、励まし、賞賛、前からあるいは後ろからの伴走めあての具体化、スタート位置の工夫等を心がける。



(4) 実践例

次頁の図-3は一昨年度からの持久走 (男女とも1500メートル) のタイムの変容例を抜粋して、グラフ化したものである。このように朝の活動での10分間走で、自分の能力に応じためあてを目指してがんばった結果が、校内マラソン大会等で測定したタイムの向上となって表れているとよいであろう。なお、他の生徒においても自分のめあてに応じて、着実に記録の伸びが見られている。

また、タイムのみでなく、めあてを達成することすなわち10分間でもらえるくしの数 (走る距離) がふえている生徒も出てきた。(P129図参照)そして走り方 (フォームやペース) がよくなった生徒、意欲が向上しめあて達成に必死でがんばり、習慣化してきた生徒等もふえてきた。

表6 「10分間走めあて一覧表」 (抜粋) 数値は竹ぐしの対
1本……150m

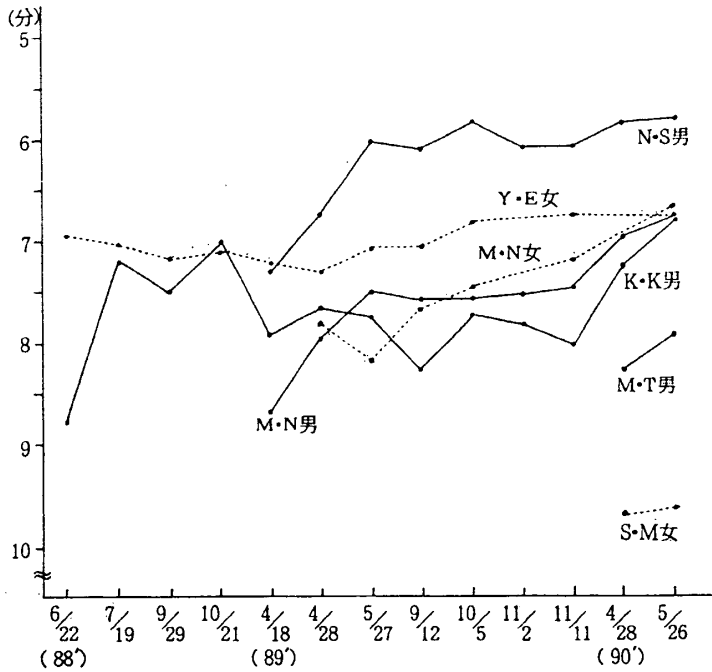


図-3 持久走タイム変容例(1500m)

(5) 考察及び今後の課題

持久走タイム及び10分間走のめあても、少しずつではあるが、着実に向上しつつある。さらには、意欲や走り方等質的な向上も見られ、毎時間の具体的な評価や意欲づけの成果が表れてきている。

しかし、今後の課題として下記の点が挙げられる。

- ・行事等が多く、継続して時間を確保することが難しかった。
- ・特に上位の生徒のタイムや、めあての延びを促すために、もっと競わせたり、ペースメーカーやライバルを意識させる等、具体的なめあてを設定する必要がある。
- ・本校をめあてとして意識できない生徒への意欲づけの方法。
- ・少しでもマナー化を防ぐため、記録としての具体的めあて、そして走り方やペース、呼吸といった質的な具体的めあての工夫
- ・走りやすい環境(コース)の設定や音楽等の工夫等

以上のような点を次年度に少しでも改善していけるよう取り組みたい。

月日 生徒	めあて	4・19	20	26	5・2	9	11	めあて	5・12	14	17
N男	4	④	3	3	3	3	3	4	3	3	④
T男	10	9	⑩	⑫	⑫	⑩	⑫	11	⑬	⑪	10
K男	13	11	10	12	⑬	⑭	14	13	13	⑭	
M男	8	6	⑩	⑩	7	7	5	7	⑧	4	4
N男	10	⑩	⑩	⑩	10	9	9	11	⑪	⑪	10
Y男	9	8	8	7	⑨	8	8	9	8	⑨	7
M女	8	⑧	⑧	7	⑧	⑨	9	8	8	8	7
N女	7	⑨	⑨	⑧	⑦	⑨	9	9	6	⑨	7
S女	4	⑥	④	⑥	⑥	3	⑤	5	3	4	⑤
M男	9	8	⑨	⑩	8	8	⑩	10	9	7	8
S男	14	13	⑮	⑮	⑮	⑮	⑭	15	⑮	⑮	⑮
Y男	13	9	⑬	⑭	12	11	11	13	12	12	⑬
O男			見学	(くし渡し)							
N男	12	⑫	11	10	⑫	⑫	⑬	13	⑬	⑬	11
N女	12	⑬	⑬	⑬	⑬	12	12	13	12	⑭	⑬
Y女	4	④	④	⑥	⑤	⑤	④	5	4	4	4
T女	4	④	④	3	④	④	④	5	⑦	4	⑤
Y女	3	2	2	④	⑤	④	④	4	④	④	
O女	9	8	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	9	⑨	⑪	⑨
K男	11	⑪	⑪	10	⑪	⑫	10	12	⑩	10	11
M男			見学	(くし渡し)							
Y女	11	10	⑪	⑪	⑩	⑪	11	⑪	⑪	8	10
E女	13	⑬	⑭	⑬	⑬	⑬	⑬	13	12	12	⑬
I女	6	⑥	⑦	5	⑥	⑥	5	7	6	5	6
F女	5	⑥	1	4	⑤	⑥	⑥	6	4	5	⑥



課題別トレーニング（主に運動機能習熟度別に5グループに分けている）

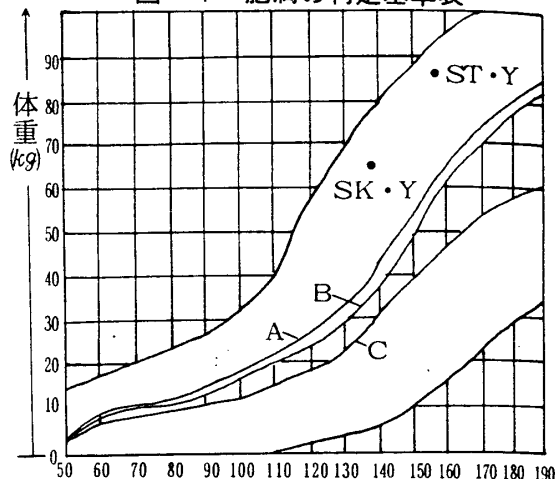
〈a1グループ〉

(1) 生徒の実態

このグループは、肥満防止が重点課題であるが、認知力や自己抑制、身体意識等に大きな遅滞がみられるために、体重の軽減が運動量の面だけでは難しいSt・Y（高2女）、Sk・Y（高2女）の2名で編成されている。

右の表にみられるように、この2名の生徒は「肥満危険域」にあり、成人期に向かって、緊急な対応が求められている。また、2名とも超肥満児であるため体重による膝への負担が大きく、特にSk・Yは、膝の痛みを訴えることも、しばしばである。

図-4 肥満の判定基準表



図にはA、B、C、三つの曲線と、それに囲まれた四つの領域がある。自分の身長と体重の交差する点を見つけ、それがどの領域にあるか見る。Aライン以上は肥満危険域。AとBラインの間は要注意域。BとCラインの間は安全域（標準的体重域）。Cライン以下はるいそう危険域であることを意味している

(2) ねらい

- ・自己認知につながる身体意識の形成
- ・微細運動を巧みに行うための大筋群の協応性の形成
- ・動的バランス能力の向上
- ・筋力強化による肥満の軽減

(3) 方針と手だて

- ・生徒の実態により、新しい取り組みには慣れるまでに時間がかかるので、なるべく昨年度からの取り組みを引き続き行なう。
- ・運動量が確保でき、膝への負担が少ない内容のものを行なう。
- ・以下のような内容で行なうが、これはグループ全体としての表であり、個別には重点項目を決めて取り組む。

実施内容	ねらい	指導上の留意点
チューブひき	筋力の強化（特に腹筋）・引力	介助しながら正確にさせる。
トランポリン	身体意識の形成・バランス能力	立位・座位等にも考慮する。
バランスボール	バランス能力・リラックス	支持を確実に行なう。

(4) 実践例（トランポリンでの変容）

	4月の実態	10月の実態
St・Y	指導者の手を持って立位を保つことはできるが、跳ぼうとしない	指導者の手を持って、30回位跳躍することができるようになった
Sk・Y	指導者の手を持って立位になれるが少しでも揺れると倒れる	指導者の手を持って一緒に40回位跳ぶことができるようになった



トランポリンをとぶSk・Y

(5) 考察及び今後の課題

この二名にとって、肥満を軽減することは、運動量の面だけでは難しく、家庭の協力を得て「食生活」を見直していくことが、最も重大な課題である。

〈a 2グループ〉

(1) 生徒の実態

本グループには、軽度精神発達遅滞の女生徒2名が所属している。指示はわかり知的理解も時間をかければある程度のことはできるが運動能力は低く（〔資料編〕参照）特に緩慢な動作が目立つ。原因は腹筋力・脚力の不足にあると思われるが、肥満がそれに拍車をかけていることが考えられる。

自分が太っているという意識が強いところに肥満グループという劣等感のようなものがあり伸び伸びと楽しく体を動かす姿が見られない実態がある。

(2) ねらい

- ・活動量を増やし、腹筋力・足腰の筋力をつける。
- ・食事の内容や量を自己管理できるようにして、体重を軽減する。

(3) 方針と手だて

実施内容	ねらい	指導上の留意点
腹筋運動・走る	筋力	チューブを固定して、補助具として利用する。
なわとび・ダンス	全身持久力・調整力	一定時間を設けて、だんだんに回数を増すようにする。
トランポリン	調整力	めあてを決め、高く姿勢よく跳ぶことを意識させる。

- ・体を動かすことが筋力をつけ、運動や身のこなしがスムーズにできることを理解させ、自主的に活動する態度をつける。

- ・見通しがもてるように活動内容を明確にする。

トランポリン	腹筋運動	なわとびダンス
← 5分 →	← 5分 →	← 10分 →

- ・肥満が体に及ぼす影響を知らせ、食べるものの内容や量を自分で気をつけるようにさせる。

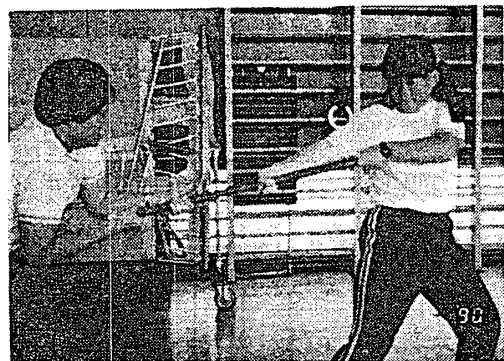
(4) 実践例

H・O（高2女）の場合

- ・全身で積極的に運動する姿が見られ出した。肥満傾向は続いているが、運動面に目覚ましい活躍が見え始めてきた。腹筋力・足腰が強くなったからではと推察する。

K・I（高3女）の場合

- ・手や足の無器用さは目立つが活動意欲がある。よく汗をかく。特に肥満にかかわることに関心を持ち始め、食事の量についての自己管理ができた。



棒をひっぱり合うK・IとH・O

(5) 考察及び今後の課題

肥満が体に及ぼす影響・腹筋力や足腰を強くすることの必要性がわかり、時間がくると自主的に運動する姿が見られ出した。筋力をつけることによって体は大きいですが心が軽くなり、生き生きとした表情になったH・O、体重は減ったが元気がないK・Iをみると、本グループではからだに合ったそれぞれの力を根気よくつけることが大切だと思われる。

〈bグループ〉

(1) 生徒の実態

男子3名、女子5名計8名（ダウン症3名、てんかん1名、慢性腎臓疾患1名、プラターウィリー症候群1名、崩壊性行動障害1名、構語障害1名）で、障害の程度は多種多様であるが、全体的に筋力が弱く、自分の力で身体を自由に動かしたり支えたりすることが苦手な生徒達で構成されている。また、力を出し切って運動する経験に乏しく基礎体力がついていない生徒も多い。

(2) ねらい

筋力・調整力を養い、楽しんで運動に取り組めるようにする。

(3) 方針と手だて

「逆上がりができるようになろう」を合言葉にし、その為には腕の筋力や腹筋・下肢の強化をしなくてはならないことを理解させ、下記のメニューに取り組んでいる。（時間は一応の目安）

腹筋	築山の登り下り	平均台	鉄棒のぶら下がり	逆上がり
←5分→	←5分	←2分→	←3分	←5分→

メニューを進めるにあたっては、個々の実態に応じて腹筋運動の回数や鉄棒のぶら下がりの時間を変えたり、各自のペースに合わせて運動を進めさせたりして、押しつけではなく各自が目的意識を持って活動できるよう配慮している。また、わずかな変容でも逃さず賞賛して「できた喜び」を味わわせ、次の活動への意欲づけとしている。



鉄棒のぶらさがりをするH・Y

(4) 実践例

4月当初は、目的意識もあまりないまま指示されたことを時間いっぱいこなすという感じであったが、逆上がりに対する意欲が高まるにつれ自主的に活動できるようになってきた。主な変容は下記のとおりである。

—H・Y(高1男)—の場合

実施内容	4月の実態	9月の実態
腹筋運動	自分のズボンを引っぱりながら3回程度しかできなかった。	両手を振りながらではあるが10~15回できるようになった。
鉄棒のぶらさがり	5秒程度。握力、腕の力に劣る。	歯をくいしばり40~50秒ぶら下がる
逆上がり	要領が分からず、腕も身体も伸びたままであった。	鉄棒に胸が近づくようになってきた 逆上がりはまだできない。

(5) 考察及び今後の課題

メニューが決まっていることもあり、見通しを持って運動できるようになってきた。そして、全員が、腹筋運動、鉄棒のぶら下がりとも記録が伸びている。今後もこの内容で取り組み、筋力・調整力を養い、逆上がりができるようになった喜びを他の運動への意欲づけとしたい。

<c1グループ>

(1) 生徒の実態

本グループは、自閉症2名（内、重度1名）、自閉的傾向1名の計3名で、集団の中では指示が通りにくい生徒で構成されている。しかし、1対1に近い対応ならば指示通りに活動ができる。体格・体位では健常児の高校生と同じ様な発達が見られるが、体を反らす経験が少ないため、猫背になってきているという抽出養訓の担当者からの指摘がある。実際にタイヤの上にあお向けに寝るとすぐに起き上がったり、苦しそうな顔をするといった状態であった。対人関係が難しい生徒たちであるので、イライラやパニックを引き起こさないように我慢をさせながら活動をおこなわなければならないグループである。

(2) ねらい

少しでも見通しを持って運動し、主に柔軟性を高める。

(3) 方針と手だて

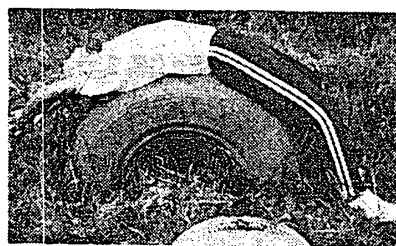
- ・指示内容（柔軟運動に限る）、指示の仕方をパターン化し、見通しをもって取り組ませる。
- ・柔軟運動のつなぎの運動は、生徒の調子を見て変化をつける。
- ・指導者が一人の場合は生徒同志でペアを組ませ実施する。

(4) 実践例

ストレッチング (二人一組で)	歩行	ストレッチング (タイヤの上で 背中反らし)	つり 橋渡 り	鉄棒	丸太 渡り	ストレッチング (トンネルの上 で背中反らし)	いろい ろな歩 き方
--------------------	----	------------------------------	---------------	----	----------	-------------------------------	------------------

—変容例M・T（1年男）の場合—

	4 月	10 月
伏が上体そらし	20cm	25cm
我慢できる時間	約 10 秒	約 3 分
様 子	ウーンと苦しそ うな声をあげ、万 才をしてできない。	自分から万才をし て、黙ったまま続 けられる。



タイヤで背をのぼすM・T

- ・4月当初はタイヤの上に寝ると息を止め、ウーンと苦しそうな声を上げ、直ぐに起き上がっていた本児ではあるが、取り組みを重ねるにつれ、呼吸もでき、万歳をしながらずっと続けることができるようになった。タイヤの上だけでなく、セラピーボールの上、丸太の上等、背反らしができる物なら何でも使って抵抗なく運動ができるようになった。

(5) 考察及び今後の課題

重度の自閉症児を含むグループであるが、生徒らにとって気持ちのいい、簡単な運動ならば、特に声かけをしなくても進んで取り組めた。背中だけでなく他の部位においてもこういった運動を見つけ、継続して指導していければと考える。

<c 2グループ>

(1) 生徒の実態

男子7名(内、情緒障害1名、てんかん1名、クライソフェルター症候群1名)、女子4名(内、てんかん1名)計11名で、比較的障害の程度は軽く、運動能力は本校高等部の中でも高いグループである。しかし、運動能力、体力診断テストの結果(「資料編」参照)からわかるように、身体の実態として全般に上腕の筋力、背筋力、握力といった上肢の筋力に劣り、また目と手の協応・巧緻性・手指機能といった調整力が養われていない為、ここに重点をおき発達段階をふまえて指導を行った。

(2) ねらい

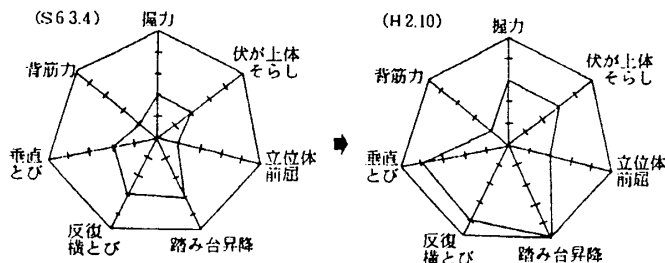
・自分の能力や体力に応じてすすんで運動し、調整力や筋力等を高める。

(3) 方針と手だて

指 導 内 容	ね ら い	指 導 上 の 留 意 点 等
○手具を使った運動(10分) ＜ボール・なわ・棒等＞ ※1. 一人で ・グループで ・二人組で	○手具の持つ特性を楽しみながら、主に調整力等を高める。	○まず一つひとつの運動を正しく覚えさせ、ボールに慣れさせる。ボールの大きさやなわ等の長さを変えたり、個人差を配慮したりして、二人組等を組ませる。
○力試しの運動 (10分) ※2. 一人で ・二人組で ・ウェイトトレーニング的なもの	○自分の体力に応じて運動し、主に筋力等を高める。	○各人の体力に応じて、まず一つひとつの運動が正確に、安全にできるようにさせる。 ○特に棒、鉄アレイ等の正しい使い方をさせる。
※1 ボールを使った運動の具体的内容例 ①その場ドリブル右左、すわって②歩いてドリブル右左、ストップ③走ってドリブル右左、ストップ④ボール体回し右左⑤足回し右左⑥8の字回し右左⑦バウンドキャッチ⑧ボール投げ上げ拍手⑨両足はさみキャッチ⑩長座体回し⑪片足上げ回し右左⑫両足あげ回し⑬二人組背中合わせ上下ボール渡し⑭二人組同時パス、バウンド⑮パスダッシュ		
※2 力試しの運動の具体的内容例 ①コンパス②パーピー③手押し車④うまとび⑤もたれ立ち⑥足ジャンケン⑦腕ジャンケン⑧おんぶ歩き⑨平均くずし⑩片足ずもう⑪補助倒立等		

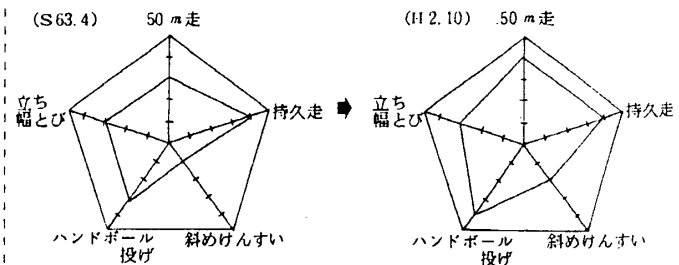
(4) 実践例～Y・E(高3女)の変容例～

◎体力テストでの変容(「資料編」参照)



特に筋力(背筋力、握力)を中心に低い傾向であったが敏捷性・持久力等を含め総合的に体力が向上しつつある。

◎運動能力テストでの内容(「資料編」参照)



特に筋持久力(斜めけんすい)が劣っていたが、投力を含め少しずつ力がつきつつある。

～5段階成績判定基準表(フィジカル)による～

(5) 考察及び今後の課題

大切なのは、継続と正しいやり方を身につけ、いかにそれを自分ですすんで取り組めたり、習慣化できるかということである。楽しんで続けられる運動を少しでも多く体験させたい。

〔2〕生活場面

1、職業

〈技能コース〉

(1) 生徒の実態

1年2名、2年4名、3年4名計10名（男子5名、女子5名）で編成されている。

自閉的傾向の3年男子がいるが比較的障害が軽く、情緒的には安定しているグループである。印刷コース班としての経験者は5名であるが、2年生3名は校内職業実習の年賀状印刷で活版印刷を経験しており、初心者は1年生の2名である。各クラスのリーダー的存在である生徒が多く、ライバル意識を持っていることから、協調性に欠ける面も見られる。特に男女関係のライバル意識が強い2年女子Nは感情的になり、学習に支障をきたす場合もある。

(2) ねらい

印刷工程（受注→文選→組版→印刷→校正→本印刷→解版→返し→包装→納品）を学習する過程の中で、各工程の技術・好ましい作業態度・精神力等を身につけることにより、〔労働〕を学びとることをねらいとしている。また、これらの学習活動に自主的に取り組もうとする意欲面を特に重視したい。1連の作業工程が全てかわりあって印刷物ができることを強調し、担当工程に責任を持つと同時にお互いが協力しあうことの大切さにも気づかせたい。

(3) 方針と手だて

- ①全員全工程習得を目指す → ○各工程の技術を習得しようとする意欲を喚起するため、「私の夢」の作文を文集にするまでの全工程を自分自身で行うことを目標とする。
 - 外注物(名刺、はがき)教材を多く受け、短期間で仕上げねばならない状況をつくり、全工程を学習する場面を多く設定する。
- ②各工程技能の習熟を目指す → ○校内職業実習（年賀状印刷・学校文集印刷）では、各工程を分担して受け持つことにより、各工程技能の習熟を図る。
 - 習熟度テストを各学期1度設けることにより、習熟への意欲を高める。
- ③自主的な学習態度を目指す → ○前時の反省会の時に次の学習内容を理解させておくことにより、印刷室に来るとすぐに自分の作業に取りかけられるようにする。
- ④協力しあう作業態度を目指す → ○初心者に対しては先輩が1対1の個別指導を行う。
 - 友達を手助けした場面を見つけ、みんなに素晴らしいことだと報告し協力することの意味を具体的に指示する。

(4) 実践例『10分間文選（拾い）習熟度テスト勉強』

①期日 平成2年5月24日と6月14日（2回のテストを実施）4回の印刷学習時間中に、各1時間テスト勉強の時間を設定。

②テスト問題

《二月二十六日は校内マラソン大会です。私は、去年よりも記録が良くなるように頑張りたいと思います。風邪をひかないように、ベストコンディションで頑張ります。》

学 年	氏名	拾い数		誤答数		誤答内容	指導内容	テスト勉強の内容
		1	2	1	2			
1	H・K	7	10	1	0	校を3号でひろう	サイズの確認	問題の紙を見るだけ
1	S・M	9	15	1	2	日→目 ソ→ソ	活字の見方再確認	用紙に番号を記入
2	N・S	25	26	1	1	ソ→ソ	活字の見方再確認	休憩時にも文選練習
2	M・N	24	67	1	1	ソ→ソ	活字の見方再確認	休憩時練習・暗記
2	A・O	19	24	1	0	ソ→ソ	活字の見方再確認	用紙の番号暗記
2	M・N	26	52	2	0	ソ→ソ ソ→ソ	活字の見方再確認	休憩時練習・暗記
3	K・K	19	19	1	0	六→五	問題を良く見る	文選をせず、返し作業
3	K・I	48	42	0	0		一番良いとはめる	1年生に教え自分はせず
3	H・Y	46	51	0	0		漢字の文選再確認	Y・Eの真似をする
3	Y・E	24	74	1	0	ソ→ソ	怠慢を厳しく注意	担任に個別指導を受ける

自主的に行うべきテスト勉強を学習の中に取り入れることにより、文選技術の向上と自主的な学習態度の育成をねらった学習である。誤答内容はほぼ全員同じ傾向にあった。自閉的傾向のK・Kは実際のマラソン大会が5月25日であったために「六」を「五」と拾っている。拾い数が増えた生徒は努力をしており、やればできることの意味が理解できた。反面、拾い数が増えなかった生徒はやり方が理解できなかつただけであり、指導側の大きな反省点として受け止めている。

(5) 考察及び今後の課題

全員全工程習得と各工程の習熟を目指したわけであるが、10名の能力差はやはり大きく、基礎技術習得の過程で個別指導をより大切にする必要性を強く感じた。自主性を持つことに関して成果が見られた点については、学習目的や作業方法が前時に生徒自信に把握されていたことが大きな要因であったと思われる。今後の課題として技術習得だけではなく、[働く]意識の向上を目指し、社会的自立へつながる学習にしたい。



印刷で活字をひろうN・S

〈製作コース〉

(1) 生徒の実態

本グループは、男子3名、女子5名の計8名を3名の教官で指導にあたっている。生徒は、てんかん2名、ダウン症2名、崩壊性行動障害1名、自閉症1名、その他と多種多様の障害をもったグループである。結果、情緒的に不安定で教室に入ってこれない、知的発達遅れのため製作内容が理解できず作業の見通しができない、精神発達の遅れのために不器用で条件にあった作品ができない等、製作以前の問題を多くもっているグループである。

(2) ねらい

「物を作る」その製品がどうされるのか、生徒達は意識することはないと予想される。製品に価値がつけられ商品となることを通して、職業とはどんなことか一人ひとりが体験することによって認識しようとするものである。

価値のある製品でなければ商品化されないという経験から、確実にでいいいに製品を作ろうという意識と態度、集中し時間いっぱい取り組む根気強さを育成するとともに世界に一つしかないという自分の作品を創造し工夫する心豊かな生活態度を身につけて欲しいと願う。

また、実際に商品を売るという場を設けることによって、あいさつ・返事・言葉づかい等、働く者として好ましい社会的対応についても経験させる配慮をする。

以上のことを要約し、ねらいを次の様に設定した。

- 自分でも“欲しい”と思う製品を工夫しながら作る。
- “難しい”と思った技術にも挑戦して製品を完成させるように努力する。
- 挨拶・返事が大きな声ではっきり言えるようにし、時と場に応じた言葉使いができる。

(3) 方針と手だて

①年間指導計画及び指導内容

	4月	5月	6月	7月	9月
題材	粘土に親しもう	灰皿、いろいろ	もう一度作ろう	小さな作品 (箸置き)	ビーズの玉
単元目標	・粘土に親しみ製作意欲を持つ。	・いろいろな方法で灰皿を作る。	・硬くなった粘土を柔らかくしてねる。	・少しの粘土を使って小さい作品を手で作る。	・ビーズ玉の穴にひもが通せる。
指導内容	1.いろいろな形作り 2.自由な方法で作る花びん	1.紐作りの灰皿 2.板作りの灰皿 3.粘土の固まりから作る灰皿	1.失敗した形を粘土にもどす 2.作りやすい硬さにする方法と、硬くない方法	1.即売会に出すための小さな作品を作る	1.ひもにビーズを通して、長く美しいネックレスを作る

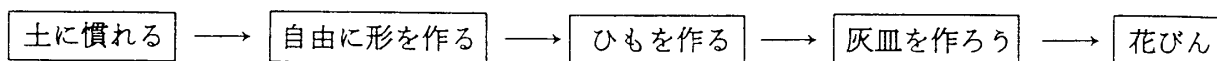
②方針・手だて

- ・生徒が自主的に参加したいと思うものを見つけ、製作可能と推察される物を課題とする。
- ・働くことの大切さを教え、積極的に作業に取り組もうとする意欲を育てる。一定時間、はげましの声かけをすることによって持続させ集中させる。

- ・作業に必要な基本的知識・技能を身につける。——目・耳などの感覚器官と、手・指先・腕その他、からだのいろいろな器官を目的に応じて、正確にすばやく協応させる訓練を同じ製品を何度も作り直すことによって行う。
- ・社会的対応の基本的内容である挨拶・返事・言葉使いを正し、遅刻をしない、後始末、身だしなみ等についても適応できるようにする。

(4) 実践例

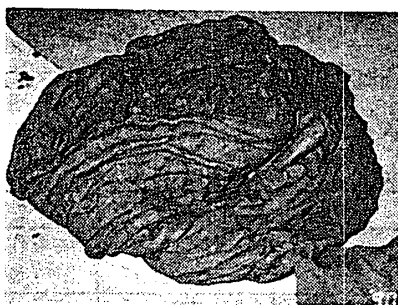
○陶芸の場における制作



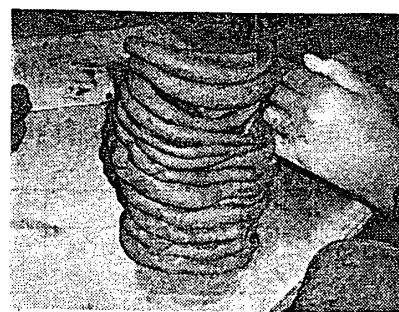
と、序々に製品に必要な条件を加えた製作過程を経て、製品作りにとりかかった。過去の学習経験を生かして、生徒は生き生きと土とかかわり、遊びの段階では40分の2単位、80分を休憩なしで持続できたのに驚かされる。灰皿を作る段階になると、球ばかり作っていたK・T（高2女）も「お客さんの部屋に灰皿がないといけんな」の一声でひもを作り、どんどん形を作り始めた。全然、形を作ることの出来なかったH・Y（高1男）も、「社長室には大きな灰皿があるな」と会社経営をする父親と灰皿を結び付けると、彼らしく小さな灰皿が形作られていった。

ひも作りのひもとひものすき間のある物に水を入れ、粘土の製品の中には水がこぼれてはいけない物があることを理解させる。

全般に平たい物は作れるが、背の高い物は出来ない傾向にあったが、2回目の9月の制作では、突然に花びんのような底が小さい物でも粘土を高く積み上げることができるようになってきた。



くずれてしまった花びん



高くそびえ立つ花びん

(5) 考察及び今後の課題

製品を作る、そしてそれが商品化されることを意識しだした生徒は生き生きと製作にはげんでいる。身近にいる人達に自分の作った物を評価してもらえる、喜んでもらえる等の声かけによって製作意欲が出てきたように推察される。技能的には一般社会ではとても通用するものではないが、反面、彼等の素直な心から作られる形には、何ともいえない素朴さが感じられる。

今後、身近にある物に関心を持ち、彼等自身自ら製作する意欲を育てるために基本的技術をしっかり押さえながら、自由に想像し楽しく製作活動のできる場を設定できればと考える。

〈作業コース〉

・ aグループ

(1) 生徒の実態

作業 a グループは、男子 2 名、女子 2 名の計 4 名より成る。この中には、自閉症 1 名、ダウン症 2 名、そして高度の肥満 2 名を含み、障害の程度も重い方のグループである。スムーズな移動が難しく、複雑な指示が通りにくい生徒達であり、働くという意識は低い。

(2) ねらい

- ・ 少しでも長い時間同じことに取り組む根気強さの養成。
- ・ あいさつ・報告等による表現力の育成。
- ・ 働く意識を少しでも高める。

(3) 方針と手だて

生徒の実態より、・一定の場所に座ったまま、手を動かすだけで行える・同じ工程を繰り返し、作業の完成が目に見える・一つの作業を完成するのに、長時間を要しない・独自の 방법으로作業に取り組むことができる、という特性を持った紙工（ダンボールの型抜き）を、行なうことにした。そして、見通しを持って行なうことができるよう、毎時間次のような活動内容で取り組んだ。

← 5 分 →	← 55 分 →	← 15 分 →	← 5 分 →
あいさつ・準備	作 業	掃除・後始末	反省・あいさつ

(4) 実践例

氏 名	4 月当初の実態	手だて・配慮	10 月の実態
S・N 1 年男	材料をしわにしたり、なめたり破ったりしていた。	型抜きの仕方を手をとって指導。材料をいためたら厳しく注意。	材料をいためることは、ほとんどなくなり、一人で 10 枚位完成できる。
H・M 1 年男	落ち着きがなく、すぐに席を立ったり、手を止めていた。	具体的に型抜きの仕方を指導し、できたら賞賛、環境を整える。	時間いっぱい席に着いたまま、作業に取り組むことができる。
St・Y 2 年女	紙工で出るゴミの掃除ばかりしており作業をしなかった。	歌を歌ってリズムカルに型抜きをする。できたら賞賛する。	指導者と一緒に、紙工をすることができるようになった。
Sk・Y 2 年女	床に座ってしまい、作業も一枚すればやめてしまっていた。	背もたれ付きの椅子を使用。音楽をかけて、雰囲気作りをする。	時間いっぱい、一人で、マイペースで作業することができる。

(5) 考察及び今後の課題

本グループの生徒達にとって、紙工という題材は、見通しを持って少しでも長い時間作業に取り組むうえで、適切であったと思われる。毎時間の積み重ねにより、各自の取り組みに変化がみられ、このように重度の障害を持った生徒にも、課題について自分なりに工夫をし、充実感を味わいながら、取り組むことができたと考えられる。

しかし、働くことへの意識はまだまだ低い。この力をどう育てていくかが、今後の課題である。



紙工作业での H・M

・bグループ

(1) 生徒の実態

作業bグループは、自閉的傾向1名を含む、男子4名から成る。4名とも、手先の巧緻性と集中力に欠け、細かい作業や、根気強く最後まで取り組むことは苦手である。また、2年生K・Oは、慢性腎炎と診断され、体調を考慮しながら作業態度を育てていくという難しい問題もかかえている。

(2) ねらい

- ・粗大な活動を通して、望ましい作業態度を育てる。
- ・あいさつ・返事・言葉使い等好ましい社会的対応を育てる。
- ・いのちあるものを育てることで、情緒の安定を図る。

(3) 方針と手だて

生徒の実態から、・粗大な活動が多い・作業の結果がすぐに現れるものでないが、単純作業の繰り返しなので、時間毎の見通しは持ち易い・自然の中でいのちのあるものを育てることで情緒の安定が図れる、という特徴を持った農耕園芸を行なうことにした。

※年間指導計画

月	4	5	6	7	9	10
題材	○農園の手入れ ○春野菜の栽培	→収穫	○農地整備 ○さつま芋の植えつけ・栽培	→	○秋野菜の植えつけ・栽培	→収穫
月	11	12	1	2	3	
題材	○農園の手入れ ○秋野菜の栽培	○春野菜の植えつけ →収穫	○農作物の加工・販売	→	○農具舎・用具の整備	→

(4) 実践例

～Y・N（1年男）の場合

	4月の実態	手だて・配慮	10月の実態
活動面	座って草取りをすることができず、すぐに立ってよそ見や話をしていた。	草の抜き方、座り方等について具体的に繰り返し指導する。	根から草が抜けないこともあるが、立っている時間より、座って取り組む時間が長くなった。
意欲面	周りのことが気になったり、独り言を言っていて、作業に集中できなかった。	声かけを頻繁に行ない、作業に向かう時間を少しずつ伸ばす。	まだ長時間集中して取り組むことは難しいが、集中できる時間が少しずつ伸びてきている。

(5) 考察及び今後の取り組み

広い農園の中で伸び伸びとからだを動かし、農作物を育てていくことは、生徒達にとって楽しく取り組むことができたようである。しかし、本グループの課題であった集中力の育成については、解放的になりすぎて、緊張場面が少なく、あまり達成できていないようである。意欲と集中力を育てる農園での指導を検討していきたい。



草とりをしているU・N

〈紙工〉（合同）

(1) 生徒の実態

高等部全生徒（男子13名、女子13名）計26名より成る。ダウン症4名、自閉的傾向3名、てんかん4名、崩壊性行動障害1名等と障害は多種多様で、重度・重複化しており、個々の発達段階には大きな格差がある。校内職業実習を通じて全生徒に紙工の経験があり、比較的どの生徒もいやがらず、すすんで取り組もうとする。しかし、ていねいさや集中力に欠け、よそ見や私語が多い、報告や返事の声が小さい、指示を待っていて自分から取りかかろうとはしない等、各々が異った課題を抱えている。

(2) ねらい

- 不良品を出さないように意識して、ていねいに作業する態度や技能を養う。
- 早くたくさんできるように、道具を選択したり、やり方を創意工夫する力をつける。
- 返事や報告をはきはき言う等、自分の思いを相手に伝える表現力を養う。

(3) 方針と手だて

①年間指導計画

※実態に応じて下記の中から重点的に指導する内容を取り上げ、繰り返し指導にあたる。

オリエンテーション		紙工に慣れよう	ていねいにしよう	早くたくさんしよう	作業競技大会
<ul style="list-style-type: none"> ・作業の全工程を知る。 ・現場の様子を知る。 ・自分の目標を決める。 ・めあての枚数を決める。 ・不良品とは ・道具の選択と工夫 	指 導 内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・紙工のやり方、作業のだんどりを知る。 ・2人1組でやってみる。 ・1人でやってみる。 ・道具や治具を使ってみる。 ・後片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・不良品がわかる。 ・不良品を取り除く。 ・検査をする。 ・不良品が出にくい方法を工夫する。 ・不良品が出ないようにていねいに、かつ早く作業する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・納期を意識して作業に取り組む。 ・制限時間内に何枚できるか。 ・早くたくさんできる方法を工夫する。 ・めあての枚数をめざして取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの中で、正確さ、枚数(不良品を除く)を競う。 ・がんばった点、悪かった点を反省し次の目標を決める。

②指導方針

- ・生徒の実態に応じて、課題別グループや等質グループを編成し、ここが直面した課題を解決したり、目標を達成できるように学習形態を工夫する。
- ・生徒の自主性を尊重し、紙工のやり方や道具の選択についても、個々の生徒の創意工夫にまかせ、優れた例については皆の前で紹介し賞賛するなどして評価する。
- ・外部から請け負った作業であることを意識づけ、不良品が出ないように、納期に間に合うように作業しなければならないことを押さえる。
- ・高等部（青年期）の生徒であることを意識して声かけ等をするようにし、高校生だという自覚を持たせるようにしたり、好ましい社会的対応ができるようになることをねらう。

(4) 実践例

紙工という同じ作業に取り組みながらも、26名それぞれに異った課題を抱えている。4名の

変容例を上げてみると次の通りとなる。

	はじめの実態例	具体的な手だてと配慮事項	変容例
S・N	紙工のやり方がよくわからず、破ったりなめてしまい材料を傷めてしまった。	<ul style="list-style-type: none"> ・材料をよく見て型ぬきするよう声かけをする。 ・できたら報告させ、不良品になっていないか確認し、傷んでいなければ大いに賞賛する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「よく見て」の声かけにより、材料の型の箇所を見て型ぬきするようになり、破れることが少なくなった。ジェスチャーと発声により「できました」の報告をするようになり、すぐに次の材料にとりかかるので、なめたりして傷めることも少なくなった。
K・T	自分のペースで作業はできるが、早く手を動かしてたくさんしようという意識があまりなかった。	<ul style="list-style-type: none"> ・時間内に〇枚するというめあてを持って取り組ませる。 ・治具や道具がうまく使いこなせるよう指導し、何枚か重ねてできるようにさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇枚がんばってしよう」という声かけにより、めあてをめぐして意欲的に取り組み、量を意識するようになってきた。道具を使って2枚重ねをするよう声かけをすると、2枚重ねをしてみようという気持ちになって取り組めるようになってきた。
H・K	量産することばかりにとらわれ、何枚も重ねてするので、破れてしまい不良品が多かった。	<ul style="list-style-type: none"> ・不良品とはどういったものか、具体物を示して理解させる。 ・検査を取り入れ、自分は不良品が多いことを認識させる。 ・不良品が出にくい方法を工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・検査を取り入れることにより、自分は不良品が多いことに気づき、重ねる枚数を減らすようになった。また、破れたらその時すぐに「不良品です」と報告するようになった。道具を使って破れにくい方法を指導したが、道具は使わず型ぬきの道具や力の入れ具合を調節する等自分で工夫するようになってきた。
N・S	手先が器用で、比較的早くたくさん、ていねいに作業するがよそ見や私語が時々あり、周囲に左右されて集中力が欠けることがあった。	<ul style="list-style-type: none"> ・めあての枚数を意識して取り組ませる。 ・作業の準備、だんどり、できたものからみ、後始末等全て自分達の手ですすめさせ、見通しを持って意欲的に取り組ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の開始前に自分達で作業しやすいように準備したり、後始末しやすいように、ゴミ箱の中にゴミが落ちるようなエプロンを考案するなど工夫するようになった。作業中は、めあてが達成できるように道具や材料の持ち方を工夫するなど集中して取り組み、検査・からみまでの全工程を一人でやり遂げるようになった。

(5) 考察及び今後の課題

紙工を職業科の学習として取り上げたことにより、今までのように、単に納期までに材料を全部やり遂げればよいという感覚から脱却し、不良品を出さないような責任ある作業をしようという意識が高まってきた。そのために、生徒一人ひとりが、



後片付けをする S k・Y



ていねいに・少しでも早く・一度にたくさんの枚数ができるように、いろいろな道具を使ってみたり、材料の持ち方・押さえ方・置き方を工夫する姿が見られた。また、なるべく生徒の力で作業を進行させよう

型ぬき作業をする N・S

としたため、自分達でやり方を考えたり、初めてのことにすすんで挑戦してみようという姿が見え始めた。今後も個々の生徒の実態に応じた手だてを考え、繰り返し指導を継続していく中で、働くことが苦にならず、すすんで作業に取り組もうとする生徒に育てていきたい。

2. 現場実習

(1) 生徒の実態

高等部では、6月に3年生7名（男子2名、女子5名）が2週間、そして10月に高等部全員26名（1年生9名、2年生10名、3年生7名）が1週間の現場実習を行っている。

校内の教育課程の中で実践している職業科や校内職業実習での学習内容を発展させ、校外の作業所や事業所において、勤労の意欲や喜びを体得させ、社会参加に必要な資質を体得させるよい機会だと考えている。

本校高等部の生徒の実態は、本稿の「生徒の実態」（資料編参照）に示しているが、生活経験を蓄積した「青年期らしい」発達の発芽がみられる。

このような生徒の実態の上にとって、春には、3年生が事業所で3名、福祉作業所で4名が実習をし、秋には、高等部全員が、事業所で12名、福祉作業所で14名が実習を行った。

事業所で現場実習する生徒にあっては、雇用の可能性が少しでもある段階の生徒から、就労を前提とする生徒まで含まれている。また、福祉作業所で実習する生徒においては、身辺自立が確立されつつあっても、からだや心が未分化な発達段階であったり、継続して労働にたずさわらせることができにくい状況の生徒など重度・重複化の傾向が顕著となっている。

事業所において実習する生徒と福祉作業所において実習する生徒を学年別に分類すると下表「秋の現場実習先」の通りである。

(2) ねらい

- ① 社会生活の中での人間関係のあり方を経験し、今まで未定着であった社会的ルールを体得させる。

- ② 職場における労働経験により、適切な作業態度や作業遂行能力を身につけさせる。

以上のねらいを達成させることは将来の職業生活のみならず、

「社会参加」のあらゆる場面で、その基盤となると考える。

(3) 方針と手だて

- ① 校内の職業科や実習で学習してきた基礎的な働く力を、きびしい職場環境の中でためすことによって、生徒個々が定着の度合いを実感する機会としたい。

また、働く場面を重視することは当然であるが、通勤に関係すること（往復の通勤方法・時刻・お金の支払い、迷った時の対処の方法など）、挨拶などの対人関係（職場に働く人との対話のあり方や態度、話の聞き方など）、自律化された健康管理（睡眠時間、投薬他）等について

学 年		作 業 所	事 業 所	生 徒 数
1	人 数	5	4	9
	%	55.5	44.5	100.0
2	人 数	5	5	10
	%	50.0	50.0	100.0
3	人 数	4	3	7
	%	57.1	42.9	100.0
全	人 数	14	12	26
	%	53.8	46.2	100.0

でも重視して取り組むこととした。

- ② 働くことが社会参加にあたって重要な位置にあることが認識できるような現場実習とした。特に、「学校における生活時間より、職場での時間はより厳しく守らなければならないこと、仕事に対しても自覚的に遂行しなければならないこと」などを理解させるよう努めた。

すなわち、原則として8時間労働に耐える精神的、肉体的能力を培う機会とも考えて実習にのぞませた。また、欠勤する場合の対処など職場に勤務する場合のきまりを理解し、経験させたり、学校での服装や持ち物とのちがいなども理解できるように努めた。

(4) 実践例

この実習期間と「研究紀要」の草稿をまとめる時期が重なったため、職場で働いている状況について報告できない。ここでは、通勤にかかわる事例を中心に指導実践をのべることとする。

- ① 進路指導主事が、生徒を実習先に連れて行く。

自分の実習先の所在地と仕事内容を知り、通勤方法を考えさせた。また、会社側にも生徒の実態等を知ってもらった。

- ② 保護者に担任から通勤方法を報告させ、家庭としてのかかわりをもたせる。

保護者にも生徒の通勤方法を理解してもらうとともに、どんな仕事をし、どのような事業所で働くのかを家庭としても知っておくようにした。(卒業後の進路問題に対する意識を高める)

- ③ 通勤方法に対しての不安のある生徒には、担任の指導で実際に事前の経験を得させるようにした。(交通機関・乗降時間・場所・バス料金の支払い等)

- ④ 実習に入ってからのは、できるかぎり生徒本人だけで通勤させ、不安のある生徒には、担任や保護者が援助するようにした。

- ⑤ 万一迷ったときに困らないように、実習日誌に自宅、実習先、学校の電話番号等を記入させ、事前に電話については練習させた。

以上のように、かなり詳細な配慮を加えて実習を行ったが、やはり、バスを乗りすごしたり、時間を間違えたりする生徒も若干あった。しかし、こうした体験が自律的な社会生活を創り出す基礎となると考えて実施してきた。

(5) 考察及び今後の課題

いま、秋の現場実習の途中であるが、日々の実習の中で生徒たちは貴重な体験をしている。重なり・重複化の傾向が顕著な本校高等部にあっては、実習先の開拓が非常に困難となってきた。そのことは学校の学習で培った生徒の力を発揮できる場をせばめてくることでもある。

今年度の取り組みでは、不本意ながら、学校内に「作業所」を設けて“現場実習”を行わざるを得なかった。結果的には、身辺自立も不十分な生徒が、作業量の面でも作業態度の面でもすばらしい力を発揮してくれている。

今後の課題としても、現場実習の形態に対する工夫や、なによりも、生徒一人ひとりが自らの発達課題に応じて“生き生きとからだを動かす場”を確保することの必要性を痛感する。

3. 生活一般（家庭科）

(1) 生徒の実態

高等部になると、衣・食・住を中心に自分の身近にある生活について非常に関心を持つと同時に“自分でやってみよう”という実行する姿が見られる。

生活単元や行事単元で取得した内容を自分の生活の中に生かす場合、必要感にせまられ見よう見まねでやりながら技術や技能を身につけている場合もあるが、今迄の経験を土台にして、どんどん意欲的に学習するグループ



野外炊飯を楽しむ生徒たち

と、何にもせずに指示されるまで黙って立っているグループの二つに分かれる。後者の場合は、やりたくても出来ないというのが現実で、やらせれば出来る生徒が何人かいると予想される。

(2) ねらい

○家庭生活の基本的なことがらが、発達段階にあわせてできるようになる。

(3) 方針と手だて

本校高等部の家庭科は「教科」としての扱いでないため、生活一般の中で実践し、指導内容は次の様に計画した。

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
1年	カレーライス	サンドウィッチ	洗たくの仕方	食事の献立	フルーツポンチと冷たい物	はんごう	スイートポテト	ケーキ作り	衣装作り	袋物作り	パーティ
2年		洗濯	軽食	冷たい食物		弁当作り	さつまいも	ケーキ作り	小物作り	小物作り	外食マナー
3年	スパゲティ作り	食事のマナー	家庭の役割おにぎり	弁当の作り方こんだて	いため物うどん	はんごうでたく	いも料理	ケーキ作り	衣装作り	礼儀態度	食事の献立

(4) 実践例

スパゲティー作り（高3、4月実施）

スパゲティーを作ることによって、何か一つでも出来るようになることをねらいとして実施する。半年後に社会人となる3年生にとって自分でつくことは重要なことの一つである。誰かの補助を受けている現在でも好き嫌いをし、好きな物を多く食べて満腹感を得ている生徒に体と食べ物のかかわりを理解させながら手作りの楽しさを知らせようとした。

物事ができるようになるためには、やってみなくてはいけない。そこで2人組一つのフライパンでスパゲティーを作ることにする。依頼心が強くやってもらうまで待っている日には、指示が上手に出せるEを、いつもバタバタしているKには、人の注意をよくするYと、おたがいに欠点を補ない合って美味しいスパゲティーを作るよう配慮した。2人という構成は、1人が何かしている、他の仕事をもう1人が必ずやらないと進展しない場が生ずる。味は、いろいろであったが、手では仕事をして口で指示する人、指示を一生懸命にやっている人、和気あいの授業風景が展開された。

(5) 考察及び今後の課題

意欲的に活動する生徒の気持ちを大切に、彼等が将来社会人となったとき役立つ内容を教材化し、よりよく豊かに生活できる技術や技能を定着させるよう、多くの場を設定したいと考える。